

「妊娠9週目で、筋腫だけを摘出して、胎児も子宮も救われました」

藤沢敦子（34歳）

結婚1カ月前の宣告

95年の春に会社の健康診断で初めて婦人科も受けてみようという気になったのは、1カ月後に結婚を控えていたからなんです。実は、その健診というのも、社内で実施した日には仕事の都合で受けられなくて、あとから社外の医療機関で受診することになってしまったんですが、この時、社外で受けていなければ子宮筋腫の発見はもっと遅れてしまったと思います。社内の健診のメニューには婦人科はありませんでしたから。

「これは大変。結婚が決まっているのなら、一日も早く産んだほうがいいわ」と健診の女医さんに言われても、「えーっ、子宮診腫？」という感じで、何を言われているのかわかりませんでした。私自身、子宮筋腫についての知識は何もなかったし、子宮筋腫を疑うような自覚症状もなかったですから。

筋腫がかなり大きいから子宮を全摘することになると思う、大学病院でよく診てもらおうといい、とその女医さんに慶応大学病院を紹介されましたが、この時は、結婚するというのに子宮全摘なんてどうしようと、ただただ恐かったです。結婚式が間近に迫っていたこともあり、実際に慶応病院に行ったのは6月に入ってからです。結婚後は仕事もしていたのでバタバタと忙しく過ぎていきましたが、いつも頭の片隅に「全摘」という言葉が張り付いていました。

思いがけない妊娠

慶応病院では一日がかりの割りには簡単な検査だけをして、また2週間後に来なさい、と言う。予約した日に行くと、若い医師が検査結果を見ながら、いきなり「困ったなあ、流産しますよ」と言うんです。なんと妊娠していたんです。7週目ということでした。

「流産する」と言われたうえに、「このままでは母体が危険なので子宮全摘を急ぐ」と告げられて、なんだか無性に腹が立ちました。言葉づかいや説明がちっとも患者の身になっていないんです。

妊娠がわかって、全摘なんてとんでもない、絶対イヤだ！と思いました。本屋に行ったら、筋腫があっても無事に出産したケースを探して医学書を読んだり、「初めての妊娠・出産」という本を拾い読みしたりしていましたが、そこでふと斎藤先生の『子宮をのこしたい10人の選択』が目についたんです。

もう夢中になって一晩で読みました。そして、翌日には先生に電話をして、すぐにも診ていただきたい、とお願いしました。不思議と不安感はありませんでした。この時に先生の本に出会っていなかったら、今、娘とともに暮らす幸せはなかったと思います。

子宮が残るのなら...

初めて訪れた広尾メディカルクリニックは、病院とは思えないような優しい雰囲気にも包まれていました。普通の住宅を大きくしたような、まさにアットホームな感じなんです。先生も看護婦さんもにこにこしていて、なんだか初めてお会いするような気がしなかったのを覚えています。

早速、超音波エコーで診ていただくと「赤ちゃんは生きていますかどうか確認できないけど、万が一赤ちゃんはダメでも子宮は救える。大丈夫、子宮は残してあげる」とおっしゃるんです。胎児の心臓の動きがエコーに出なかったようなのです。

帰って主人にこのことを話し、残念だけど子供は諦めて、とにかく子宮を救っていただこう、ということになりました。子宮が残れば先に希望をつなぐことができるわけですから。そして、翌日すぐに「子供は諦めます。手術をお願いします」と先生に電話をしました。もう一刻も早く、手術していただきたいという思いでいっぱいでした。

手術前の検査ではCTスキャンなどレントゲンをたくさん撮りましたから、これで子供はいよいよダメだな、とすっかり覚悟を決めました。子供は諦めると決めたものの、この時までには心のどこかで「もしかしたら...」というかすかな望みを捨てきれずにいたんだと思います。

生きてる、生きてる

手術の当日、手術前にもう1度超音波エコーで診察していた先生が「赤ちゃん、生きているかもしれない。前よりたしかに大きくなっている」とおっしゃるんです。「えーっ!」と驚く私に、「うん、動いてる、動いてる。助けられるかもしれない」と重ねておっしゃるんです。付き添って来た主人にもこのことが伝えられて、急ぎょ「まず赤ちゃんを助けましょう」ということになりました。この子はどうしても産まれてきたい子なのだ、とその時ベッドの上で強く思いました。」

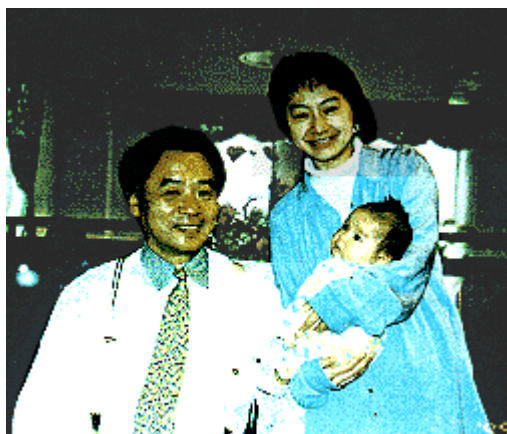
手術は3時間くらいで終わりました。摘出された筋腫は870グラム。「大丈夫、筋腫も完全に取れたよ」と先生はいつもと変わらぬ笑顔で教えてくださいましたが、胎児を守りながらこれほどの筋腫を取り除くのはどんなに大変なことだったかと、ありがたくて心の中で手を合わせました。この思いは主人も両親も同じだったと思います。



ひとつだけ辛かったのは、手術後に「赤ちゃんに影響するといけないから、痛み止めは極力我慢して」と言われたこと。もう痛くて痛くて、2、3日は痛みとの戦いでしたが、それでも先生は「我慢できるよね」とにこにこしておっしゃるんです。

痛みが和らいだ4日目に、手術後初めてエコーを撮りました。その時の感動は今も鮮明です。「生きてる、生きてる。よかった、よかった」と先生がひときわ明るい声をあげたのです。ああ、よかった、本当によかった、と心の底から涙がこみ上げてきて、止まりませんでした。

月満ちて出産



一度は諦めた子供も、大学病院で全摘と宣告された子宮も、先生の手で救っていただきました。手術後の経過はきわめて順調で、予定日の1週間前に帝王切開で出産。2700グラムの女の子でした。出産まで毎月、先生の手でエコーに映して子供の様子を見せてもらっていましたが、なんだか初めて見るというより「こんにちわ」という感じで、妙になつかしい気持ちでした。産まれてきたかったこの子が、先生の手で生命をつないでいただいたことに、感謝してもしきれない思いです。大事に育てていかなければと思っています。

「子宮内膜症の痛みから解放されて、生理も順調。ヨットを楽しんでいます」

玉城薫（32歳）

初潮とともに痛みが始まった

振り返ってみれば、子宮内膜症による痛みとの付き合いは、初潮以来かれこれ20年に及びます。小学校5年生で初潮を迎えて、6年生の時にはもう下腹にかなりの痛みがありました。もっとも子宮内膜症（腺筋症）と診断されたのは25歳の時ですから、少女の頃の生理痛が子宮内膜症によるものかどうかはわかりませんが、高校生の頃には私の生理痛のひどさはクラスでも有名でした。

生理が始まると顔は真っ青、下腹部が重苦しく痛み、吐き気もありました。受け持ちの先生が見かねて「家に帰って休みなさい」と早退させてくれるほどでした。保健の先生には「若いうちから生理痛の薬を飲むのはよくない」と言われていましたので、とにかく生理が終わるまでじっと我慢、我慢の繰り返し。毎月こんなふうで、本当にゆううつでした。

それでも23歳の頃までは、1日くらい休めばなんとか生理を切り抜けることができました。学生時代から付き合い合っていた主人と結婚することになって、一度婦人科で診てもらったことがあるんですが、その時は別に病名を告げられることもなく「早く結婚して、早く子供をつくりなさい。妊娠すれば軽くなるだろうから、薬には頼らないほうがいい」と言われました。

生理になると寝込む

25歳で子宮内膜症と診断された時は、その前日に生理でもないのに下腹の左側にただならぬ痛みを覚えて、救急車で病院に行ったんです。とりあえず当直の医師が診てくれて、婦人科で受診するように勧められました。次の日に行った婦人科で初めて子宮内膜症（腺筋症）という病名を聞かされ、生理の時の激しい下腹痛がその代表的な症状であることを知りました。

その時の医師は「いずれ我慢ができなくなって、手術することになるだろう」と言いましたが、手術が子宮全摘を意味することはわかっていました。

年を追って痛みと月経量がひどくなるのがこの病気の特徴で、事実、27歳の頃には、生理になると痛くて痛くて起きあがることもできないほどで、ナプキンを取り替えにトイレに立つことさえ容易ではありませんでした。とても出勤して仕事をすることでなく、生理になると必ず休みをもらっていましたから、職場では私の病気を知らない人はいませんでした。

薬で治したい

28歳、29歳の2年間ほどは、なんとか薬で治せないものかと、杉並の杉山四郎先生の医院に通いました。後で知ったことですが、斎藤先生は若き修行時代に杉山先生のもとでたくさんの子宮手術を手がけていらしたんですね。杉山先生にお世話になった4年後に、今度は斎藤先生の手で子宮を救っていただくことになろうとは…。不思議なご縁を感じます。

杉山先生のところでは、「ボンゾール」と「スプレキア」を使ったホルモン療法を試みました。半年薬を使って、半年様子を見る、という治療を2回繰り返したわけですが、その間に薬の副作用で7キロも体重が増えてしまった。これはまったく予想外のことでした。

杉山先生は「まあ、気長にやりましょうよ」と励ましてくれましたが、痛みのほうはさほど改善されず、「ボルタレン」という痛み止めの薬を定期的にもらっていました。この頃には市販の痛み止めの薬はまったく効かなくなって、そればかりか市販薬を飲むとゲーゲーと猛烈な吐き気が襲ってきて、苦しくてたまらずに救急車のお世話になったことが年に2、3回はありました。

絶え間ない痛みの日々

30歳になる頃には、痛みはいよいよひどくなって、生理の時だけでなく絶えず痛みを感じるようになって、夜中に起き出して痛み止めを飲むこともしょっちゅうでした。体調が悪い日は寝ているしかなくて、これではフルタイムで働くのは無理と、正社員から週3日勤務のアルバイトに切り替えたのもこの頃です。

たとえ大事な仕事の予定があっても、生理と重なってしまうと休まざるを得ない。そういう状態では仕事を続けることもむずかしいのですが、幸い主人の友人が経営する会社に勤務していましたので、周囲の人がわかってくれて、この点は恵まれていたと思います。

痛みを我慢し続けたあげくに子宮全摘手術ではたまらない、何か外科手術以外の手だてはないものかと、順天堂大学病院で精密検査を受けたのは昨年12月末のことです。MRIも撮りました。結婚以来、一度も妊娠したことがないので、主人はその可能性についても聞きたかったようです。結果は、「こんな重症の腺筋症患者で、妊娠した例はいまだに一例もない」というもので、私には自分の症状の重さがわかっていましたから驚きはなかったのですが、主人はかなりショック??潮??だったようです。「もう無理」とダメ押しされたようなものですから。

内膜症でも子宮は残るんだ

今にして思えば、この頃が精神的にも最も辛い時期でした。13年間可愛がってきた猫に死なれた寂しさもあって、鬱々とした最悪の精神状態で1月、2月を過ごしていました。いっそガンであったなら、命と引き換えに躊躇なく子宮全摘手術を受けるのだけれど...、この先、どこまで我慢できるのだろう...、そんな思いが頭の中をぐるぐる回っていました。

家の近くの図書館で斎藤先生の『子宮をのこしたい 10人の選択』を手にしたのは、ちょうどその頃で、目次に「子宮内膜症（腺筋症）」の文字を見つけて一気に読みました。子宮筋腫について書かれた本はそれまでも見てきましたが、内膜症にもふれた本は初めてでした。

子宮内膜症でも保存手術ができるんだ。驚きと期待が入り交じった思いで胸が熱くなり、この手術を受けようと決断するまでさほど時間はかかりませんでした。3月半ばに手術の予約を入れたその晩に義父が危篤となり、結局、最初の予約はキャンセル。その後、義父の死、お葬式と忙しく過ぎて、手術は5月27日に受けました。

手術前の最後の生理は義父のお葬式と重なってしまい、寝込むわけにもいかず、これは本当に辛かった。真っ青な顔をして、ようやく座っているのを見かねて、叔父が「大丈夫か」と声をかけてくれたくらいです。

術後1カ月でヨットに

手術は局部麻酔で、3時間くらいかかったでしょうか。子宮内膜にできていた多発性ポリープ1グラム、病変部分245グラムを摘出しました。手術中に、手術室まで来るように呼ばれた主人は、何か不測の事態が起きたのではないかと、ものすごく驚いたのだそうです。これはいつも先生がなさることで、妻の子宮や卵巣を見せてくれるというものです。



先生の手で病巣はきれいに摘出され、子宮の機能は残りました。しかも、再発のおそれはないでしょうという。手術後、あんなに悩まされていた下腹の痛みは嘘のようにとれて、生理もきちんとやってきました。ちょっと下腹部が重苦しい感じがして、試しに市販の痛み止めを飲んだところ、ケロリと治ってしまったのにはびっくりしましたね。

そうそう、術後1カ月しないうちにヨットに乗ってました。ヨットは私たち夫婦の共通の趣味。子供がいなくてもヨットがあるからいいね、と話していたほどのヨット好きなんです。7月末にはレースに出るための回航で、生理中なのにヨットで2日間の航海をしました。これは劇的な変化です。

それから、もうひとつハッピーな変化は夫婦生活がもどってきたこと。手術前の2年あまりは、ふだんでも痛くて痛くて、主人には悪いなと思いつつもセックスが苦痛で、自然と遠ざかっていたのですが、手術で長い間の痛みから解放されて、今は私も主人も幸せです。

玉城さんから直接色々お話をお聞きしたいかたは、次のアドレスで tamachan@ocean.or.jp 連絡がとれます。

Copyright (C) 1996
HIROO MEDICAL CLINIC

結婚9年目の妊娠、そして流産予告

しばらく体調の悪い日が続いて、生理も遅れていたもので「もしかしたら…」と近所の総合病院に行ったのは、33歳の4月1日でした。25歳で結婚してから一度も妊娠したことがなかったので、「妊娠しています」と聞かされてビックリしたのですが、それ以上に驚いたのは「大きな筋腫がありますよ。まあ今の段階では流産の可能性もあるし、エコーで見ても胎児の影も見えないくらいだから、うまく育つかどうかはわかりませんよ」と告げられたことです。医師が指さすエコーの画像には、大きな筋腫のかたまりと、筋腫に押しつぶされそうな小さなふくろが微かに映っていました。まだ心臓の鼓動も見えないこの小さなふくろが、私に宿った初めての生命でした。

この時の医師の診察は「どうせ流産するのだから…」といわんばかりに、内診も痛かったし、お腹を押すしぐさも手荒でした。医師は、妊娠の継続はとても無理、と決めてかかっていたのかもしれませんが。「なんとか筋腫を取り除いて、胎児を救う方法はないでしょうか」という私の質問には「無理ですよ」と言うばかりでした。

斎藤先生との出会い

エコーで映し出された小さなふくろが、その日以来、私の頭から離れなくなっていました。それまでさほど子供を欲しいと思ったこともなかった私が、どうしてもこの子を産みたい、この子を流産するわけにはいかない、と強く強く思ったことは、自分でも意外でした。きっと、流産すると決めてかかっている医師への反発もあったのだと思います。

どうしても小さな生命が諦められなくて、勤務先の上司に相談を持ちかけました。上司は長らく科学部の記者として取材をしてきた経験から、医学関係に広いネットワークを持っていたからです。

上司に紹介されたのが斎藤先生でした。初診は4月5日。この時の診察では、エコーの画像に鼓動がはっきりと見えました。ああ、生きている、悪条件の中で精いっぱい大きくなろうとしている、そう思ったら、なにがなんでもこの生命を生かしたくて、斎藤先生に手術してもらうことを即決しました。

エコーの診断だけで手術

「赤ちゃんは助けられるかもしれません」。斎藤先生は手術の前にそうおっしゃいましたが、腸や胃をせり上げるほどに大きくなっている筋腫を取り除いて胎児を守る手術が、どれほど難しく危険性を伴うものであるかは想像に難くありません。私の後にも妊娠初期に筋腫を摘出して胎児を助けるというケースは続いています。この難しい手術の第1号が私でした。

とにかくお腹の中の子供のことが気がかりで、少しでも安全であるようにとMRIの撮影も固辞し、先生にはエコーの結果だけをたよりに手術をしていただくことになりました。初めてのケースであるうえに、十分なデータが揃わないままの手術で、先生はさぞご苦労されたことと思います。

手術は4月18日。摘出された筋腫は600グラムでした。先生の手術では、筋腫の摘出だけなら横に7、8センチ、最小限の長さを切開するのがふつうですが、私の場合は帝王切開で出産することを考慮して縦にメスが入りました。手術には、私を斎藤先生に引き合わせてくれた上司も立ち会いましたが、病状や手術法の説明も含めて、すべてをオープンにするのが先生のやりかたです。



10日目に見た元気な鼓動

「赤ちゃんは助かったよ」。手術後にそう聞かされて一安心したものの、やはりエコーで鼓動を確認するまでは正直なところ心配でした。手術後はどの患者も多少出血するのですが、その出血が術後の経過によるものなのか、流産の兆候を示すものなのか、内心ハラハラして過ごしたことを思い出します。

辛かったのは、術後、身動きがとれなかったこと。胎児の安定をはかるために絶対安静で、両腕には化膿止めと流産防止の点滴の針が入り、寝返りを打つこともできません。腰が痛くて痛くて、我慢できずに看護婦さんに訴えたところ、すぐに包帯で円座を作って腰の下に当てがってくれました。患者が願うことをできる限り叶えようとするこの親身さは、斎藤先生、看護婦さん、事務の方みなさんに共通するものだと感じました。

手術して10日目、エコーの画像に胎児がはっきりと映りました。筋腫に押しつぶされそうにしていたのが、子宮の真ん中で伸びやかに鼓動を打っている様子を目の当たりにして、心底「よかった！」と思いました。この思いは先生も同じだったかもしれません。何回も何回も「よかったね」とおっしゃいました。看護婦さんも代わる代わるエコーを見に来てくれて、クリニック中のみなさんが祝福してくださいました。

思いがけない陣痛

「しばらくは安静に」という注意を受けて退院して、いくら経たないうちに突然の出血。また先生の元にUターンすることになりました。それから2カ月あまり、胎児の成長をエコーで確認していただきながら、広尾メディカルクリニック始まって以来の長期入院の身となりました。ほかの患者さんはたいてい月曜日に手術して土曜日には元気になって退院していきますから、私は入院中に何人もの患者さんを見送りました。この間に感じたことは、先生や看護婦さんがどの患者にも分け隔てなく親身でやさしいということです。

勤務先には出産まで休むことを了解してもらい、夏の暑い盛りを自宅で過ごしました。そして、9月の半ば、いつものように定期検診で先生に診ていただいた帰り道、車の中でお腹が痛くなってきたのです。痛みは一定の間隔で強くなっていき、どうにも我慢ができなくなりました。運転していた主人に車をとめてもらい、急いで先生に電話してもらいました。

先生とすぐに連絡がとれたのは本当にラッキーでした。「今すぐに行くから、動かずに待っているように」とおっしゃって駆けつけてくれたのですが、途中で何度も主人の携帯電話に様子をたずねる電話を入れ、あと何分ぐらいで到着するかの連絡を入れてくださいました。私や主人が不安に陥らないように気遣ってくださったのだと思います。

早産、そして、わが家の王様に

予定日より2カ月も早い出産となりました。急遽、先生の所で陣痛を抑える処置をしていただきましたが、その間にも先生は未熟児を受け入れてもらえる病院をさがして、あちこちに連絡してくださっていたのです。先生の母校、東邦大学で受け入れてもらえることになり、先生の車で東邦大学へ急行。帝王切開で無事に産出することができました。

出産後に聞いた話では、子供はすでに産道に下りかかっていた、帝王切開したものの安全に取り出すのが大変だったとか。いろいろな困難を一つ一つクリアしながらここまで育った胎児なのだから、と先生は出産時も胎児の安全を第一に考えて、東邦大の先生にあれこれと指示されたと後からうかがいました。



子供は1カ月保育器に入り、その後半月を新生児室で過ごし、何の心配もなく退院することができました。結婚9年目にして新しい家族を迎えることになったわが家は、以来、小さな王様に振り回されています。

思えば、4月の子宮保存手術から9月の出産まで、本当に斎藤先生にはお世話になりっぱなしでした。医師と患者という一般的な関係を越えた親身なケアを受けて、私も主人も言い尽くせない感謝と信頼を先生に寄せています。先生に出会うことがなければ現在の幸せを手に入れることはできませんでしたし、何でも相談することのできる生涯の医師に出会えたことは、わが家の財産だと思っています。

不整脈が消えた

授乳中もずっとなかった生理が再び始まったのは、出産後7、8カ月ほどしてからでしたが、「生理ってこんなにも楽なものだったのか」と驚きました。それまでは生理痛がひどく、月経量も多かったのですが、子宮筋腫を疑うこともなく「こんなものなのだろう」と半ば諦めていたのです。

妊娠がわかる1、2年前からは生理の時はもちろん、生理でない時にも身体がだるく、不整脈に悩まされていました。数百メートル歩くと不整脈が出て、しばらく立ち止まるとは脈が鎮まるのを待つ、という繰り返しでした。ところが、子宮保存手術を受けてからは、この不整脈がピタリと止まってしまったのです。

私が気づかぬところで、筋腫が日々肥大し、腸や膀胱は言うまでもなく、心臓や肺など多くの臓器に負担をかけていたことを知りました。今は不整脈が消えて、快適な日を過ごしています。

「インターネットで広尾を知り、間一髪、子宮全摘を免れました」

大山真理子（44歳）

全摘宣告に落ち込む

昨年の10月16日のことです。会社から帰ってきた主人が「こんな病院があるそうだよ」と言って、広尾のホームページをプリントしたものを渡してくれました。会社のインターネットで検索していたら、偶然、広尾のことが目に止まったのだそうです。

実はこの数日前、私は通院中の婦人科で全摘手術を告げられて、相当落ち込んでいました。この病院には2月から10月まで9カ月近く通ってホルモン治療を受けていたのですが、まさか全摘手術になろうとは思っていませんでしたから、「そろそろ手術したほうが…」と切り出されても、すぐには医師の言葉を理解できず、「手術って、どういう手術ですか」と聞き返してしまうほどでした。

「全摘手術です。そのほうが先々安心ですよ」と重ねて言われて、もう頭の中は真っ白。ホルモン治療で子宮筋腫は改善されるものと信じていましたから、いったいこれまでの治療は何のための治療だったの?!、と涙があふれてきました。頭の中がよほど混乱していたんでしょう、「手術って、お腹を切るんでしょうか」なんて質問までしてしまって、医師から気の毒そうに「ええ、切ることになりますね」とダメ押しをされてしまいました。

そんないきさつがあって、家でも暗い顔をしてため息ばかりついていましたから、主人も気がかりだったのでしょうか。仕事の合間に、インターネットで子宮関連の情報を検索してくれたのだと思います。主人は「偶然見つけた」と言っていますが。

手術が待ち遠しい

とにかく、斎藤先生に一度お話を聞いてこようと、初めてお訪ねしたのが10月22日。そして、1週間後に「お願いします」と電話を入れました。

この間、迷いがなかったかと言えば嘘で、今まで通院していた病院の医師もいい人でしたから、もう若くはないのだから全摘でも仕方ないかと思ったり、いや、やっぱり子宮は残しておきたいと思ったり…。母たちに相談すると、筋腫で子宮を取った人を身近に何人も知っているものですから、保存手術ってどんな手術なの?と、かえって危ぶむ声もあって、先生に電話で返事をするまでには気持ちが揺れ動きました。

最終的に斎藤先生に手術していただくことと決めたのは、「自分が後悔しない方を選びなさい。手術を受けるのは君自身なんだから」という主人の言葉があったからです。全摘手術後の後遺症で、ホルモンのバランスが崩れて更年期のような症状になったり、周辺の臓器に負担がかかるために体調が悪くなるという話を聞いていたので、自分の健康を守るためには保存手術を受けるべきだ、と私なりに判断したのです。

婦人画報社の『子宮をのこしたいー10人の選択』を読んで、自分の選択は間違っていなかったと確信しました。そう思ったら、つい1週間前の泣きべそはどこへやら、すごく気持ちが明るくなって、手術が待ち遠しいような、入院が楽しみなような気分になりました。元来が楽天的なんです。

手術前の検査で広尾に行った時に、先生がその週に手術をした二人の患者さんに会わせてくださいました。手術して4日目の木曜日でしたが、お二人とも1階の病室から2階のリビングまで上がってこられて、とても元気そうにおしゃべりしていました。4日目でこんなに元気なら、退院後はすぐに普通の生活に戻れそうだと思います。手術後の生活に思いを馳せて、あれをしよう、あそこに出かけよう、と予定をあれこれと考えてルンルン気分でした。

痛みを癒す先生の声

手術は11月25日。1時から始めて、終わったのが4時半でした。摘出された筋腫は720グラム。それと腺筋症の疑いのある部位を5グラム摘出しました。手術中の出血も少なく、もちろん輸血の必要もなく、筋腫は残らず取っていただきました。



手術直後にホルマリン液に浸かった摘出物を先生に見せられた時には、その生々しさに思わず目をそむけてしまったのですが、退院の時にいただいたファイルに綴じられている摘出物の写真を見たら、大小13個の筋腫がありました。こんなにたくさん、しかも石のように硬い筋腫が子宮いっぱいにあったのでは、とてもホルモン療法で治るわけがない、私の筋腫はホルモン療法で改善される段階をとくに過ぎていたのだ、と納得してしまいました。

手術後辛かったのみです。レーザー治療とは言っても生身の身体にメスを入れることに変わりはないのですから、痛いのは当たり前なのですが、あまりにもルンルン気分入院し、手術を簡単に考えていたぶん、痛さを余計に感じたのだと思います。

動くし痛いし、微熱もありましたので、少し歩く練習をして、後はベッドに寝てばかりいました。食事木曜日まではお粥で、便秘しないようにと消化のよいメニューを出してくださるのですが、食欲がなく、残さずに食べたのは果物だけ。30代と40代ではやはり回復力が違うのかな、と思ったりしていました。

それでも”日薬”とはよく言ったもので、一日一日痛みは和らぎ、木曜日にはシャワーをつかってサッパリしました。そして、何よりも薬になったのは、時々病室にいられて「どう？大丈夫だね」と大きな声をかけてくださる先生の存在。笑顔でそう言われると、単純な私は「もう大丈夫」と暗示にかかってしまうのです。

入院中は看護婦さんがパジャマなどの洗濯もしてくださって、完全看護とは言え、ありがたかったです。

退院後、無理しない

入院中に見舞いに来てくれた妹に、「考えていたより痛いわ」と訴えたら、「でも、痛いだけならいいじゃない。これが全摘手術だったら、痛み悲しさとか後悔とかが混じって、もっともっと辛いはずよ」と言われて、全くその通りだと思いました。痛みの記憶は健康を取り戻せば忘れるものですが、子宮を失った喪失感や切なさはいつまでも癒されないでしょうから。

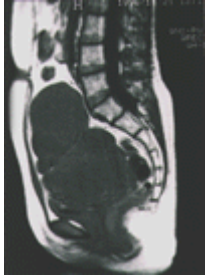



退院後は母が手伝いに来てくれましたので、最初の1、2週間はとにかく安静にしていて、3週目に車で郵便局や銀行に出かけましたが、それでも少し動き過ぎるとお腹が痛くなるという状態でした。母からは「お産と同じなのだから、後を大事にしなくてはいけない」と言われましたが、これは年齢を重ねた人の体験的な知恵だと思いました。回復のスピードには年齢差や個人差はあるでしょうが、早く元気になるためには、退院後2週間は無理をしてはいけなさと痛感しています。

インターネットのおかげで全摘手術を免れただけでも好運でしたが、もし10年前に斎藤先生に出会っていたら...、と思うこの頃です。私の筋腫は20年くらい前から出来ていたものだろうと手術の後に先生から伺いましたが、結婚後子供に恵まれなかったのは筋腫があったことも原因の一つかも知れません。10年前に保存手術を受けていたら、あるいは...、とふと考えてしまいました。

夫婦二人の生活に何の不满もないのですが、保存手術後に出産したという例を聞いて、もしこれから先、妊娠することがあったらどうしよう、と正直なところ戸惑いを感じています。子供のことなどすっかり忘れて生活してきたのに、今ほんの微かな可能性に胸をときめかせています。

術前・術後のMRI

<p>術後9ヶ月目の9月4日にMRIを撮りました。 ほぼ正常な大きさに戻っています。</p>	術前	術後9ヶ月
		

「自分が納得できる医師に出会えるまで、諦めてはいけなかった」と

松坂直子（47歳）

黄色く変色した切り抜き

もう8年前の話ですが、「週刊文春」の89年1月26日号に広尾メディカルクリニックの紹介記事が掲載されています。偶然見た「重症の子宮筋腫に福音となるか、レーザーメス治療」というタイトルに釘付けになったのは、私自身が子宮の病気を自覚していたからです。

こういう病院もあるんだ、いざとなったらここに行けばいいんだ。ひどくなる一方の症状に悩みながらも、駆け込み寺を知ったような心強い気持ちになって、その記事を切り抜いて折り畳んで手帳に挟みました

そうして4年が過ぎました。この間、切り抜きは手帳に挟んだまま。あちこちの病院を転々としながらも、切り抜きを捨てることができず、93年の春に斎藤先生に手術していただくまで、すっかり黄色く変色してしまった切り抜きを手帳に挟んだままずっと持ち続けていました。

痛みから始まった

初めて、子宮の異常を自覚したのは、「週刊文春」の記事に出会う4年前の85年のことでした。ちょうど、夫の海外研修に付いて渡米する引越しの最中でした。明日には荷物を出さなくてはならないと、大車輪で荷造りをして夜中に、ものすごい腹痛に襲われたのです。部屋中荷物だらけで、身体を横にするところもない。辛うじて押し入れにわずかなスペースを見つけて、布団にくるまっていたのを思い出します。ただ、その時が生理日だったのかどうかは記憶がはっきりしません。

引越し先のニューヨークでも、腹痛と月経過多の症状が頻繁に出るようになって、きっと子宮に病気があるに違いないと自覚するようになりましたが、それが内性子宮内膜症（腺筋症）によるものであると診断がついたのは、ずーっと後になって広尾で斎藤先生に診ていただいてからです。

おかしい、おかしいと思いながらも治療を受けずにいたニューヨーク時代と帰国後の3年ぐらいの間に、おそらく腺筋症が進行したのだと思います。

病院ジブシーの日々

夫も私も舞台スタッフの仕事をしています。公演が始まると、舞台のスタッフというのは現場を離れることができません。腹痛とものすごい出血がある生理日といえども、頻繁にトイレに行くことができない。しかも、生理の期間がだんだん長くなっていく。実際、トイレの問題は深刻でした。生理が始まると、まるで赤ん坊を連れて外出する母親のようにカサばるほどオムツ（ナプキン）を持たなくてはならない。行動を共にすることの多い夫も、行く先々で「トイレは大丈夫？」と言うほどでした。

これはなんとかしなくては、と東大病院に通うようになったのは、「週刊文春」の記事を読んだのとほぼ同じ頃だったと思います。東大病院では「子宮筋腫はあるけれど小さいから、貧血の治療をする」と言われて、通院している間にもらったのは増血剤だけでした。通院しているのに痛みや月経過多はいつにも改善されず、しかも、行くたびに診察する医師が変わっている。何か質問しても、迷惑そうに「まあ、様子を見て、ひどくなるようなら切るしかないですね」と言う。医師への不信感とここにずっと通っていてもダメだという思いが膨らんで、それから病院を転々とする病院ジブシーが始まりました。

思い出した切り抜き

最後に行ったのが、広尾の日赤中央病院で、ここでも「症状を改善するには全摘しかない」と言われました。この頃は生理時の痛みはますます強く、病院でもらっている痛み止めも全く効かなくなっていました。ひと月のうちの3分の1は痛みで何も手につかないのです。

そういう状態が繰り返される生活にほとんど疲れてしまって、藁をもつかむ思いと言うのでしょうか、日赤からの帰り道に、ふとあの切り抜きの病院に電話をしてみる気になったのです。所在地の所番地から、おそらく日赤の近くにあるはずだと思って電話したのですが、当時の広尾メディカルクリニックは日赤と目と鼻の先にありました。

一緒に付き添ってきていた夫によれば、斎藤先生に会って話を聞くうちに、「この先生なら大丈夫だ」と直感したといいます。あちこちの病院で医者不信に陥っていた私は、むしろ夫の「予約しちゃえ、予約しちゃえ」という言葉に背中を押されるうにして斎藤先生の手術を受けることを決めました。

斎藤先生に行き着く



広尾で手術を受けたのは93年3月ですから、自覚症状を覚えるようになってから8年、東大病院を皮切りに病院ジプシーを始めてから4年あまりが経過していました。

なぜ、89年に斎藤先生の存在を知りながら、その時にすぐ診てもらわなかったのだろうという悔いがありますが、ひとつには自費診療であるために自己負担が大きいことがネックになっていました。金額どころの話ではないという状態にまで悪化して、行き着いたところが斎藤先生でした。この経過は広尾にやってくる大多数の患者さんが通るプロセスでもあるようです。

たしかに一時的には大きな出費ですが、健康を取り戻して働けるようになれば、いくらでも挽回できる。手術を受けて痛みと出血から解放されて、健康には代えられないとつくづく思いました。

元気になってから、「どこの病院でも不可能と言われた子宮保存手術を受けて、私は治りました！」と声を大にして言いたくて、斎藤先生が作ってくださった術前、術後の経過を記録したファイルを持って、東大病院に行ったことがあります。そして、当時のカルテの開示を求めました。「東大でなぜこういう治療ができないのですか」と聞く私に、対応した医師は「ウチで行ったのは貧血の治療だけ。子宮内膜症の治療はしていませんから」と言い、カルテも見せてはくれませんでした。なおも食い下がる私にしびしび診断書を書いてくれましたが、そこにはたしかに貧血の改善のために増血剤を処方したことだけが書かれていました。

病院ジプシーを経て斎藤先生に救われた私の経験から、納得できる医師に治療を委ねる時まで諦めてはいけないと痛感しています。この思いは術後4年が過ぎた今も変わりません。



「手術後、生まれて初めて生理痛のない生理がきて、うれし泣きました」

H.R. (24歳)

生理は痛いものと思っていた

生理は痛いものだとずっと思ってきました。中学の時から生理になると腰のあたりがずっしりと重苦しい感じがあったし、高校生になってからは、それに下腹痛が加わりました。学校はなんとか休まずに行っていたけれど、痛くて保健室で寝ていたこともよくありました。母から「鎮痛剤は身体に悪いから使わない方がいい」と言われていたので、いつも「早く終わってほしい」と我慢していました。高校卒業後アメリカの短大に入学してから、痛みはさらにひどくなって、もう痛み止めなしには過ごせなくなりました。短大からそのまま同じ都市にある大学に編入し会計学を専攻していたのですが、授業がびっしりで生理痛があっても休めませんでした。

それで、生理になるとイブプロフェンという鎮痛剤を飲むようになりました。これは日本で市販されている鎮痛剤の2倍もの鎮痛効果をもつ強い薬ですが、はじめは1日1錠でしのげていたものが、だんだん効かなくなって、朝と夜の2錠飲まずにはいられなくなりました。それでも痛みを抑えきれなくなって、「いったい、どこまでひどくなるんだろう」ととても不安でした。

体力、気力がなえてい

アメリカのカイロプラクティクスの治療院で、痛みを緩和するためにハリ治療や、蓬（よもぎ）の葉っぱを蒸してお腹の上に乗せるという漢方療法を受けたりしました。たしかに治療を受けた直後は少しラクになるのですが、痛みが改善されることはありませんでした。

痛みとともに毎月の月経量も多くなって、そのせいなのか生理になると貧血を起こすようになりました。ただ座っているだけなのに急に気分が悪くなって、冷や汗が出て、目の前が真っ白になる。「血の気が引く」というあの気分は本当にイヤなものです。

生理が始まると決まって下痢を起こすようになったのもこの頃です。下腹の痛みと貧血と下痢。それも少しずつ症状が重くなっていくようで、生理がくるたびに体力と気力が衰えていくのがわかりました。

このまま放っておくわけにはいかないと思って、アメリカの日系の病院で診てもらったところ、「卵巣に水腫が2つあるが、子宮は正常なので、様子を見ましょう」と言われ、ピルを処方してくれました。ピルを飲んでいる間は痛みはおさまっていたのですが、1カ月半後にピルを止めたら、痛みは前よりひどくなってしまいました。病気自体はちっとも治っていなかったのですね。

生理の苦しみの中で広尾を知る

そのような状況の中、昨年9月に帰国。そして、昔から婦人科では有名といわれている横浜の病院で受診しました。毎月、生理になると駅でしゃがみ込むほどの痛みがあると訴えたのですが、内診とエコーで診察してもらった結果は「月経困難症だが、子宮は正常」。なんだか納得できませんでした。帰国して初めての生理も痛みと貧血と下痢を伴ってやってきました。その苦しみの中で、なにか治療につながる情報はないものかと、コンピューターを使ってインターネット上の検索ページで「子宮」と入力してアクセスしてみました。アメリカ留学中に授業でコンピューターを使っていたので、インターネットで情報を入手することには慣れていました。そして、思いがけず広尾の「子宮筋腫オンライン」に出会ったのです。

あ、これだ、と目の前がぱーっと開けていくのがわかりました。自分が探していた情報が、実に詳細に書かれている。しかも、自分と同じように生理で苦しんできた人がたくさんいる。ホームページを読んで、すぐに斎藤先生に電話をしました。

悪さしているものが見つかった

初診は昨年の10月8日。一人で行きました。エコーに映った子宮には小石のようなコロコロしたものがいくつもあって、斎藤先生は即座に「筋腫と内膜症の合併症。でも、手術で治ります」とおっしゃいました。どこの病院でも「異常なし」と言われていたのに、あまりにも簡単に病名を告げられて、一瞬あっけにとられてしまったというのが正直な感想です。

斎藤先生には「質問があったら、いつでもいらっしゃい」と言われていたので、今回は母と一緒に、聞きたいことをメモに書いて行きました。この時の所見も初診と同じで、「放っておけば症状が進んで、これからも苦しむことになりますよ」とおっしゃいました。

私の生理が重く、顔色が悪くなったことを誰よりも心配していた母は、「悪さをしているものが見つかったわね」と原因がわかったことにホッとした様子でした。

手術を受けることを決めたのは、「生理が軽くなるのなら」という思いからです。斎藤先生は病気のことや治療については納得いくまで説明してくださいますが、決してご自分から「手術を受けた方がいいですよ」とはおっしゃいません。母も「手術を受けるかどうかは、あなたの気持ちで決めなさい」と言っていました。結局、手術することを決心したのは、初めて自分の身体にメスが入るという不安以上に、この生理の苦しみから解放されたいという思いの方がずっと大きかったのだと思います。

今では生理がくるのが楽しみ

手術は12月9日。お腹にメスを入れることは生まれて初めての経験なので、もうガチガチに緊張していました。私の身体が緊張でよほどこわばっていたからなのでしょう、看護婦さんに「息はしてくださいね」と言われてしまいました。その一言でなんだかフツと力が抜けて、気持ちが軽くなったように思います。そして、手術の間中、ずっと手を握っていただきました。手術台の上にいる私の不安な気持ちを「大丈夫、大丈夫」と包み込んでくれて、本当にありがたかったです。

摘出された筋腫は9グラム、それと卵巣の水腫が1つ。何キロもの筋腫を摘出された患者さんもいると聞いたので、それに比べれば私の場合はごくわずか。でも、このわずかな異物が悪さをして、生理のたびに痛い苦しい思いをしていたのです。症状の重さは筋腫の大きさでは測れないものだということがよくわかりました。



年が明けて、1月26日。手術後、初めての生理がきました。少し腰のあたりが重いような気がしていたら、生理が始まりました。「あれー、これが生理？」と自分でも信じられないほど、生まれて初めて生理痛も貧血もない生理でした。量も驚くほど少なく、嬉しくて嬉しくて、嬉し泣きしてしまいました。生理の間中、もうニコニコし通してました。

なんとかしてこの喜びを伝えたい気持ちで一杯だったのと、感謝の気持ちを表したくて、早速斎藤先生へお手紙を書きました。お返事をすぐにいただき、そのお手紙の中で一番ハッとしたのが「患者さんが自分で知識をつけて立ち上がるか、方法の無い(つまり子宮全摘)のが現状です」という言葉です。やはり、納得のいく方法を自分自身で選択することがいかに重要であるかを思い知りました。あれほど苦しかった毎月の生理が、今は嘘のよう。なんだか次の生理がくるのが楽しみです。

結婚式20日前の手術、絶対に治るんだと必死に祈りました

上田ひろみ(29歳)

出血が止まらず救急病院へ

忘れもしません。結婚式を40日後に控えた今年の10月5日、土曜日のことです。生理初日から数えて8日目だったのですが、出血が止まらなくなってしまいました。「どうしよう。とりあえず近所の婦人科に行ってみよう」と、二階の自室から出て、階段を降りたところでフラフラと倒れてしまったのです。意識はありました。びっくりして私に話しかける母の声や救急車をよぶ家族の声はたしかに聞こえてくるのですが、全身から血の気が引いていく感じで、何を聞かれても言葉にはなりませんでした。

救急病院に指定されている都内の総合病院に運び込まれた時、血圧は58-35、血球中のヘモグロビン量は5.9で、極度の貧血状態でした。貧血が急激な失血によるものであることはすぐにわかり、婦人科で失血の原因を調べることになりました。

超音波診断による検査の結果は全く思いがけないものでした。「子宮に筋腫があり、いくつかは子宮内膜にできているため、今は止血できたとしても、いつまた出血するか予断を許さない。筋腫もかなり大きいので全摘するしかない」というのです。結婚式を控えて、子宮筋腫という診断すら驚きなのに、そのうえ「全摘」と告げられて、それはもう大変なショックでした。両親にとってもそのショックは相当なものだったと思います。

「絶対に子宮を取られてはダメ」

救急病院ですぐに輸血と止血の処理が取られました。輸血量は1日に400CCを4日間。輸血と止血の点滴で、とりあえず貧血の改善のためにしばらく入院することになりました。症状が落ち着いたところで全摘手術、というのが病院側の考えです。

点滴で腕がふさがれた状態でベッドに横たわる私のそばで、「絶対に子宮を取られてはダメ」と姉は言いました。4つ年上のこの姉は、実は4年前、クリニックがまだ広尾にあった頃、斎藤先生に助けをいただいているのです。当時29歳だった姉は、子宮に赤ちゃんの頭ほどの大きさの筋腫が見つかって、やはり全摘を宣告されました。これから結婚も、出産もという姉には全摘など到底受け入れられるはずもなく、子宮を残してくれる医師を探してあちこちの本や雑誌を調べ、斎藤先生に行き着いたという経緯があります。姉の筋腫は250グラムほどのものでしたが、斎藤先生の手によって筋腫だけを取り除き、子宮の機能を完全に残していただきました。

姉の存在がどれほど心強いものであったか。姉のこの体験がなければ私の人生は全く違ったものになっていたでしょう。結婚式の直前に子宮全摘だなんて、あまりにもシリアスで、もし姉の体験がなければ結婚そのものを考え直していたかもしれません。

結婚式にぎりぎりセーフの手術

姉を通して広尾を、斎藤先生を知っていたことが、すべてを幸いな方向に導いてくれました。姉はすぐに斎藤先生に電話をして、子宮保存手術をしていただきたいこと、そのためには入院中の病院からどのように退院すればよいかなどを相談してくれました。

斎藤先生は決断が早いのです。結婚式から逆算して手術日は10月28日、手術前のMRI検査は23日と決まりました。手術は毎週1回、月曜日だけですから、この日を外したら予定通り11月16日に結婚式を挙げることはまず無理。23日の検査、28日の手術というスケジュールは、結婚式にぎりぎりセーフの日程でした。

とにかく無事に検査の日を迎えたいという思いでいっぱいでした。もしそれまでにまた出血が始まれば、輸血と止血の繰り返しで検査どころではなくなります。病院のベッドで、お腹の上に手を当てて「斎藤先生のところにたどり着けば絶対に大丈夫だから、どうかそれまで出血しませんように」と祈りました。あんなに必死な思いで祈ったことはこれまでありませんでした。

入院中の病院には、「婚約者の親類に婦人科の医者がいるので、そちらで手術をする」と言って、貧血が改善したところで退院させてもらうようお願いしました。婚約者の親類に...という話は口実なのですが、斎藤先生に行き着くためには「嘘も方便」です。

彼も広尾にアクセスしてくれた

姉が斎藤先生に連絡をとってくれたのとほぼ同時に、婚約者の彼もインターネット上の検索ページで「子宮」でアクセスして、広尾のホームページを見つけてくれました。姉から広尾の話聞いた彼は「そういう先進的な医療をしている先生なら、きっとホームページを開いているに違いない」と思って検索したそうですが、予想通りホームページでいろいろな情報を得て、彼も広尾で手術することを強く勧めてくれました

救急病院にはちょうど2週間入院して、10月18日に退院。退院した日から28日の手術日までは斎藤先生に処方していただいたホルモン剤で生理を止めていました。手術日が次の生理の予定日に当たっていたからです。これまで私の生理は28日周期できちんきちんとやってきて、3、4日ずれることが1年に1回あるくらいで、ほとんど狂うことはありませんでした。

救急病院に運び込まれるまで自分の子宮に筋腫があるなんて考えてもみませんでした。それは自覚症状がほとんどなかったのと生理の周期が規則的だったためです。子宮筋腫とわかって、そういえば2年ほど前に生理痛がひどい時期があったなあと思い出したくらいの自覚症状で、生理痛もいつの間にか気にならなくなっていました。

手術をして姉の痛みを知る

広尾の診察室に初めて入っていった時、斎藤先生に「お姉さんが入って来たかと思った。よく似ているね」と言われてしまいましたが、姉と私は顔かたちや感じがよく似ているんです。おまけに体質まで似てて、私も姉とほぼ同じ年齢で手術を受けることになりました。

手術への不安はありませんでした。それどころか無事に手術日を迎えて、早くよくなりたいという気持ちが日に日に大きくなっていきました。

手術は腰椎麻酔で行われるので意識はありますから、周りの状況はよくわかります。斎藤先生が助手の先生と話している声も聞こえてくるし、レーザーを使って筋腫を取り除く時のちょっと焦げたような臭いもしてきます。痛くはないのですがお腹が下に引っ張られるような感覚があって、「きっと、今、筋腫の大きいのを子宮から切り離しているんだな」と察することもできます。

手術中にちょっと肩のあたりが寒くなって、看護婦さんにそう言ったら、すぐにタオルを掛けてくれました。時々看護婦さんが「大丈夫ですか」と声をかけてくれたり、手を握っていてくれたりするのがとても心強かったです。

摘出された筋腫は全部で415グラム。それと内膜の中にできていたポリープが40グラム。ポリープは小さいのがたくさんありました。手術をしてみ、4年前に姉が体験した痛みが初めてわかりました。姉は頑張り屋さんで、退院した翌週から勤めに出ていましたので、その頃は「退院すれば、もうなんともないんだな」とのんきに姉を見ていましたが、いざ自分が手術を受けてみると、どうしてどうして退院後も痛みはあるのです。今更ながら、痛いのをじっと我慢して会社に行っていた姉を「偉いなあ」と思います。



かけがえのない体験

退院後、挙式の日まではジャスト2週間。10月の初めに救急病院に入院してからというものの挙式の準備はストップしたままでしたから、それからが大忙しでした。披露宴を行うレストランの打ち合わせや席次決め、荷物の整理、もうやらなければいけないことが山のようにあって、とても寝ているどころではありません。身体を動かしたり、物を持ったりするとお腹に響いて、思わずお腹に手を当ててしまうという状態でしたが、それでもやらなければいけないことに背中を押されるようにして日を過ごすうちに、あっという間に挙式当日になってしまいました。

ありがたいことに、当日はその前日まであった痛みが消えて、本当に晴れやかな気持ちで新しい生活に踏み出すことができました。挙式までの40日あまりは緊急入院に始まり、筋腫の発見、手術と思いがけないことの連続で、両親や姉、そして彼には心配や迷惑をかけ、大変な思いをさせたけれども、周りのみんなに助けられて結婚の日を迎えられたことに言い尽くせぬほど感謝しています。

結婚後の慌ただしい生活のなかで、術後初めての生理が、手術の日からちょうど28日目にやってきました。子宮内膜にまでメスを入れる手術をしながら28日目にはきちんと生理がくるのですから、女性の身体のメカニズムってなんと正確なのだろうと驚いてしまいます。そして、もうひとつ驚いたのは生理の軽さで、出血量が比較にならないほど少ないのです。

それまでは出血が気になって夜中に2度3度と起きていたのが、朝までぐっすり眠っていられるようになりました。いままでたいした苦労もなく生きてきた私には、結婚直前のこの体験が「健康に、地に足をつけてしっかり生きていくように」という神様の無言の教えであるように思えてなりません。あの日の突然の出血がもう少し遅かったら、おそらく予定通りに結婚式を迎えることはできなかったと思うと、この絶妙なタイミングで訪れた病気が、私に健康の大切さと周りの人たちの思いやりの深さを教えてくれました。かけがえのない体験だったと思います。

通常は金曜日に退院するところを、術後の胎児の様子を見るために1週間多く入院させていただいたのですが、入院中のことについて「入院日誌」から抜粋したいと思います。

入院日誌から

手術の直後は痛くて日記を書くどころではありませんでしたが、痛みが和らぐにつれ退屈を紛らすため手帳にその日の出来事を書き付けました。以下は入院日誌からの抜粋です。手術した日とその翌日、翌々日分は、後で書いたものです。

5月22日(月)

8:30入院。1階左奥の部屋。点滴2本して待機。うがいもダメとのこと。PM4:30~7:30手術。手術中とその後2、3時間は酸素マスクが付いていた。夫、9時過ぎ帰る。夜半少しずつ痛くなるが、麻酔が効いていて下半身が動かない。しびれていて看護婦さんに2回動かしてもらおうよう頼むが麻酔が効いていると曲げても伸びてしまうとのこと。

5月23日(火)

AM5時か6時頃、ようやく右足が動くようになるが、左足はまだ動かない。ずっと同じ姿勢なので背中が熱く、気持ち悪い。腰や足もきつい。体中が動かないので、ほとんど眠れない。麻酔がだんだん切れて足が少しずつ動くようになってくると、腹部の痛みも徐々に強くなってきて、今度は痛みで体が動かさない。朝7時頃、麻酔切れたよう。

お小水の管、体液の管、もう1本の管、両手に点滴。終日絶対安静。タオルを絞ってもらって、顔と口の中をふく。せき込んだりすると大変なので、うがいもダメ。2時頃、夫来る。午後になって時折うとうとできるようになる。お小水の管、違和感あり。そのせいもあって眠れない。夕食に思いがけず、お茶、水が出る。

5月24日(水)

朝食にプリン(大きいので半分残す)。午前中、手術室まで看護婦さんに付き添われて、先生にお小水の管ともう1本の管を抜いていただく。戻ってきてトイレ、はじめちょっと痛かったが、すっきり。ウオッシュレットもして嬉しかった。ついでに歯磨きをして口をきれいにし、点滴がついているので顔は拭くだけにしておく。電動ベッドに戻り、看護婦さんに寝かせてもらう。

先生に寝返りを打って早くガスを出すように言われるが痛くてちょっと無理。動かないのも疲れるし、動いても痛い。動いたほうが精神的には落ちつくのだが、何をしても痛い。夫、3時頃来てくれる。痛がりながらも歩いてトイレに行くのを見て、少し安心してくれる。

昼食はおもゆとお茶。夕食は何だったか?少しご飯粒が入ったおもゆ?と家から持参したヨーグルトキノコを1口だけ食べる。

5月25日(木)

夜中にお腹が張って痛いのでトイレに行き、ガスが出てお腹が張っていたのが治る。手術室にて最後の管を抜く。消毒の薬がしみる。

朝食はお粥、昼食は鍋焼きうどん。1時に母と妹が来る。元気そうなので安心してもらう。テレビや新聞を見たり、おしゃべり。看護婦さんに2階のリビングまで連れていってもらい、3人で麦茶をいただいて飲む。その後、待望のシャワーを浴び、髪も洗う。お腹はテーピング。ドライヤーまでして部屋に戻る。その間に看護婦さんが着替えの洗濯までしてくださる。さわやかになって4:30に夕食。全粥、しゃけ、卵の花、煮物など。おいしいが量が多いので、3分の1しか食べられない。夜になってお腹がすくのだ。

7時過ぎ、山崎さん（同じ日に手術をした）に来ていただき、初めてお話をします。彼女はもう点滴が抜けています。9時頃までおしゃべり。テレビを見て10時頃就寝。だいぶよく眠れる。

5月26日（金）

朝7時に検温。まだ眠い。朝食はパン、サラダ、スープ。点滴はまだ2本。黄色い方のビタミン剤は昼までに2袋が終わってしまうが、もう1本はシャワーの時以外、外れたことがない。お腹もすかないし、暇なので午前中廊下を歩く。部屋に戻っていると、今日の昼食は2階で一同揃ってととのこと。ビックリ、嬉しい。ヒラメのサラダ、かぼちゃ、じゃがいも、豆ご飯、もずく、タラなどにワインと麦茶のご馳走。食べきれない。手術から1年目の佐野さんもいらして、私たち患者、看護婦さん、事務の方、みんなでお食事をする。締めくりはケーキ、コーヒー、フルーツ。食べ過ぎた。

夕食は4：30なので全然（4分の1しか）食べられなくて、8時過ぎにお腹がすいてしまう。検温の時に看護婦さんにそう言ったら、「少々お待ちください」と言って、2、30分したら本当に4度目の食事が出てきた。ビックリ、残さず平らげる。

5月27日（土）

午前中に思いがけず出血。トイレに入っていて、出血する。すぐナースコールを押す。先生が見て手術室へ。内診して「大丈夫」と言われ、部屋でしばらく休む。同じ日に手術した山崎さん、松井さんが退院の挨拶にみえる。

5月29日（月）

午前中に超音波で見てくださる。なんと子どもは元気だ。ピョンピョンはねて手足をバタバタしているとのこと。そう言われるとそう見える。元気でよかった！これでも手術の傷があるので見にくいとのこと、4カ月（後2週）したらもっとよく見えて、性別もわかるそう。感激して泣いてしまう。退院は金曜日頃とのこと。

昼食は夫の分まで親子どんぶりを持って来てくださる。こんな天国みたいな病院はないと思う。先生の腕前もブラックジャックみたいで、あんなに大きな筋腫を取ったのに、もうあまり痛くないのだ。子どもも無事で夢のよう。嘘じゃないと思うたびに嬉しくて涙が出てしまう。

先生が先週金曜日の食事会のアルバムを持ってきてくださる。夕食はアコウダイの煮付け、茶碗蒸し、さといもとコンニャクの煮物、ご飯、お吸物、みかん。（多かったので、ご飯とアコウダイは半分残してしまう）

5月30日（火）

寝っていると腹部のテープのところがかゆい。3時過ぎと7時半頃、ナースコールしてしまう。1：30PMからシャワー。シャワーの後、オレンジジュース。薬を付け替えてもらい、今日からガーゼになる。でも、かゆい。

今まで前かがみでいたせいか腰（尾てい骨）が痛い。看護婦さんが湿布をしてくださり、円座も貸してもらおう。夕食はサンマ、大豆の煮物、鶏肉のたれ焼き、キノコのマヨネーズ和え、ご飯、味噌汁。夫に電話して、10時頃寝る。

5月31日（水）

7時過ぎ、さわやかな目覚め。朝、パン。昼、ちらし寿司。昼食後、先生が2階で今週入院の田中さんに引き合わせてくださる。手術3日目なのに、明るく笑いながらお話するので（痛くないのかなあ）とビックリしてしまう。そこへ妹が来る。先生が和菓子を買ってきてくださり、看護婦さんたちのご馳走になり、2時間近くおしゃべりする。

夕食は酢豚、カボチャの煮物、きゅうりとホタテのサラダ、長芋の刻んだもの、ご飯、味噌汁。夕食後、看護婦さんに腹部の薬を付け替えてもらう。テープのところ、相変わらずかゆい。

6月1日(木)

かゆいのとちょっとチクチクするのを除けば気分爽快。午前中に先生がいらして、明日の食事会が終わったら退院してよいとのこと。嬉しい！

「妊娠9週で手術に成功。入院日誌に「先生はブラックジャックみたい」と書きました。」

加藤恵子（39歳）

結婚11年目の出産

95年の12月15日、妊娠38週目に帝王切開で長女南（みなみ）が産まれました。2200グラムと小さくはありましたが、産声がとても大きくて、元気いっぱい。「元気な赤ちゃんですよ」と言われて、言葉にならない感激がこみ上げてきたのを今でもはっきり思い出します。

南は斎藤先生に救っていただいた子どもです。結婚11年目に初めて授かった子ども、しかも1000グラムを超える筋腫がある子宮に宿った生命でした。

その年の春、風邪のような症状が長らく続いて体調が思わしくないので、近所の病院に行ったところ、全く思いがけなく妊娠していることがわかりました。「妊娠はしていますが、大きな子宮筋腫があるので、すぐに流産する可能性が高い」というのが、その時の医師の診断でした。

子宮筋腫はわかっていて

結婚後10年も子どもに恵まれなかったのが、妊娠しているという診断にはビックリしましたが、子宮筋腫があることには驚きませんでした。というのは、前年の秋に、たまたま受けた区の子宮がん検診で「筋腫がありますよ」と言われていたからです。

その時に、子宮筋腫がどんな病気なのか知りたくて、家の近所の図書館で読んだのが斎藤先生の『子宮をのこしたい 10人の選択』でした。検診時に「筋腫がかなり大きいので、いずれ手術することになるだろう」と告げられていたので、どうせ手術するなら広尾で、斎藤先生の子宮保存手術を、と心に決めてはいました。

検診後すぐに広尾に行かなかったのは、差し迫った自覚症状がなかったからです。たしかに、生理3、4日目あたりは出血量が多くて、夜は腰の下にタオルを敷いて寝ないと心配な状態でしたが、それも1カ月のうちの数日のことなので、それほど深刻には考えていませんでした。

「どうして掻爬するの」と先生

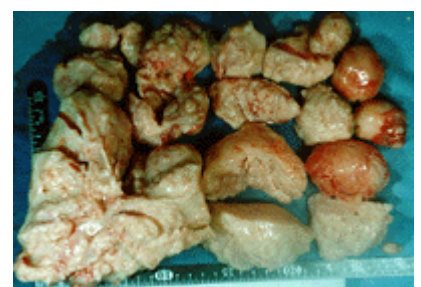
しかし、妊娠がわかって、筋腫があるために流産すると言われれば、話は別です。なんとかならないものか、すぐにでも先生に診ていただきたくて、本をたよりに早速、広尾に電話をしました。斎藤先生に診ていただいて、それでもダメなら仕方ない、という気持ちでした。

初診は5月10日。診察を受けながら私は「どうせ流産するものなら、子どもは諦めますので掻爬して筋腫だけ取って子宮は残してください」とお願いしました。すると、先生は「どうして赤ちゃんを掻爬するの。エコーでは元気だったよ」とおっしゃいました。胎児を守りながら筋腫だけを取り除くという手術ができるなどは夢にも思わなかった私は、胎児を掻爬するのもしむなしと考えていたのですが、先生はすでに私の前に2人、妊娠中の患者さんの子宮保存手術を成功させておられたのです。

とにかく、流産が始まらないうちに手術していただきたくて、無理をお願いして5月22日が手術日と決まりました。すでに2人の患者さんの手術が決まっているところに割り込むようなかたちで、この日の手術は3人ということになりました。

私の手術は3番目、夕方から始まりました。胎児を守りながらの手術とあって、切開部は12センチと長く、3時間近くかかりました。摘出された筋腫は1515グラム。こんなに大きな筋腫があったのでは、胎児の命は時間の問題だったろうと思いました。

通常は金曜日に退院するところを、術後の胎児の様子を見るために1週間多く入院させていただいたのですが、入院中のことについて「入院日誌」から抜粋したいと思います。



入院日誌から

手術の直後は痛くて日記を書くどころではありませんでしたが、痛みが和らぐにつれ退屈を紛らすため手帳にその日の出来事を書き付けました。以下は入院日誌からの抜粋です。手術した日とその翌日、翌々日分は、後で書いたものです。

5月22日(月)

8:30入院。1階左奥の部屋。点滴2本して待機。うがいもダメとのこと。PM4:30~7:30手術。手術中とその後2、3時間は酸素マスクが付いていた。夫、9時過ぎ帰る。夜半少しずつ痛くなるが、麻酔が効いていて下半身が動かない。しびれていて看護婦さんに2回動かしてもらおうよう頼むが麻酔が効いていると曲げて伸ばしてしまうとのこと。

5月23日(火)

AM5時か6時頃、ようやく右足が動くようになるが、左足はまだ動かない。ずっと同じ姿勢なので背中が熱く、気持ち悪い。腰や足もきつい。体中が動かないので、ほとんど眠れない。麻酔がだんだん切れて足が少しずつ動くようになってくると、腹部の痛みも徐々に強くなってきて、今度は痛みで体が動かさない。朝7時頃、麻酔切れたよう。

お小水の管、体液の管、もう1本の管、両手に点滴。終日絶対安静。タオルを絞ってもらって、顔と口の中をふく。せき込んだりすると大変なので、うがいもダメ。2時頃、夫来る。午後になって時折うとうとできるようになる。お小水の管、違和感あり。そのせいもあって眠れない。夕食に思いがけず、お茶、水が出る。

5月24日(水)

朝食にプリン(大きいので半分残す)。午前中、手術室まで看護婦さんに付き添われて、先生にお小水の管ともう1本の管を抜いていただく。戻ってきてトイレ、はじめちょっと痛かったが、すっきり。ウオッシュレットもして嬉しかった。ついでに歯磨きをして口をきれいにし、点滴がついているので顔は拭くだけしておく。電動ベッドに戻り、看護婦さんに寝かせてもらう。

先生に寝返りを打って早くガスを出すように言われるが痛くてちょっと無理。動かないのも疲れるし、動いても痛い。動いたほうが精神的には落ちつくのだが、何をしても痛い。夫、3時頃来てくれる。痛がりながらも歩いてトイレに行くのを見て、少し安心してくれる。

昼食はおもゆとお茶。夕食は何だったか?少しご飯粒が入ったおもゆ?と家から持参したヨーグルトキノコを1口だけ食べる。

5月25日(木)

夜中にお腹が張って痛いのでトイレに行き、ガスが出てお腹が張っていたのが治る。手術室にて最後の管を抜く。消毒の薬がしみる。

朝食はお粥、昼食は鍋焼きうどん。1時に母と妹が来る。元気そうで安心してもらおう。テレビや新聞を見たり、おしゃべり。看護婦さんに2階のリビングまで連れていってもらい、3人で麦茶をいただいて飲む。その後、待望のシャワーを浴び、髪も洗う。お腹はテーピング。ドライヤーまでして部屋に戻る。その間に看護婦さんが着替えの洗濯までしてくださる。さわやかになって4:30に夕食。全粥、しゃけ、卵の花、煮物など。おいしいが量が多いので、3分の1しか食べられない。夜になってお腹がすくのだ。

7時過ぎ、山崎さん(同じ日に手術をした)に来ていただき、初めてお話をする。彼女はもう点滴が抜けていた。9時頃までおしゃべり。テレビを見て10時頃就寝。だいぶよく眠れる。

5月26日(金)

朝7時に検温。まだ眠い。朝食はパン、サラダ、スープ。点滴はまだ2本。黄色い方のビタミン剤は昼までに2袋が終わってしまうが、もう1本はシャワーの時以外、外れたことがない。お腹もすかないし、暇なので午前中廊下を歩く。部屋に戻っていると、今日の昼食は2階で一同揃ってとるとのこと。ビックリ、嬉しい。ヒラメのサラダ、かぼちゃ、じゃがいも、豆ご飯、もずく、タラなどにワインと麦茶のご馳走。食べきれな

い。手術から1年目の佐野さんもいらして、私たち患者、看護婦さん、事務の方、みんなでお食事をす。締めくくりはケーキ、コーヒー、フルーツ。食べ過ぎた。

夕食は4:30なので全然(4分の1しか)食べられなくて、8時過ぎにお腹がすいてしまう。検温の時に看護婦さんにそう言ったら、「少々お待ちください」と言って、2、30分したら本当に4度目の食事が出てきた。ビックリ、残さず平らげる。

5月27日(土)

午前中に思いがけず出血。トイレに入っていて、出血する。すぐナースコールを押す。先生が見て手術室へ。内診して「大丈夫」と言われ、部屋でしばらく休む。同じ日に手術した山崎さん、松井さんが退院の挨拶にみえる。

5月29日(月)

午前中に超音波で見てくださる。なんと子どもは元気だ。ピョンピョンはねて手足をバタバタしているとのこと。そう言われるとそう見える。元気でよかった!これでも手術の傷があるので見にくいとのことで、4カ月(後2週)したらもっとよく見えて、性別もわかるそう。感激して泣いてしまう。退院は金曜日頃とのこと。

昼食は夫の分まで親子どんぶりを持って来てくださる。こんな天国みたいな病院はないと思う。先生の腕前もブラックジャックみたいで、あんなに大きな筋腫を取ったのに、もうあまり痛くないのだ。子どもも無事で夢のよう。嘘じゃないと思うたびに嬉しくて涙が出てしまう。

先生が先週金曜日の食事会のアルバムを持ってきてくださる。夕食はアコウダイの煮付け、茶碗蒸し、さといもとコンニャクの煮物、ご飯、お吸物、みかん。(多かったので、ご飯とアコウダイは半分残してしまう)

5月30日(火)

寝ていると腹部のテープのところがかゆい。3時過ぎと7時半頃、ナースコールしてしまう。1:30PMからシャワー。シャワーの後、オレンジジュース。薬を付け替えてもらい、今日からガーゼになる。でも、かゆい。

今まで前かがみでいたせいか腰(尾てい骨)が痛い。看護婦さんが湿布をしてくださり、円座も貸してもらう。夕食はサンマ、大豆の煮物、鶏肉のたれ焼き、キノコのマヨネーズ和え、ご飯、味噌汁。夫に電話して、10時頃寝る。

5月31日(水)

7時過ぎ、さわやかな目覚め。朝、パン。昼、ちらし寿司。昼食後、先生が2階で今週入院の田中さんに引き合わせてくださる。手術3日目なのに、明るく笑いながらお話するので(痛くないのかなあ)とビックリしてしまう。そこへ妹が来る。先生が和菓子を買ってきてくださり、看護婦さんたちとご馳走になり、2時間近くおしゃべりする。

夕食は酢豚、カボチャの煮物、きゅうりとホタテのサラダ、長芋の刻んだもの、ご飯、味噌汁。夕食後、看護婦さんに腹部の薬を付け替えてもらう。テープのところ、相変わらずかゆい。

6月1日(木)

かゆいのとちょっとチクチクするのを除けば気分爽快。午前中に先生がいらして、明日の食事会が終わったら退院してよいとのこと。嬉しい!

「患者さんにインタビューしてきたライター阿部が、5月19日、患者となって手術を受けました」…レポートその1

阿部まさ子（47歳）

ミイラ取りがミイラになって…

皆さんにお読みいただいているこのホームページの記事を書くために、毎月のように広尾MCで斎藤先生のお話をうかがい、患者さんにインタビューしてきた私が、全く思いがけなく子宮保存手術を受けました。今日は術後12日目です。まず、手術を受けることになったいきさつからお話しましょう。

「えーっ?!、私も子宮筋腫?!」、近くの内科医で「お腹にかなり大きなしこりが触れるので、婦人科に行くように」と言われて、まさきに頭をよぎったのが「えーっ?!」という思いでした。内科医に行ったのは、連休中から下腹痛と腰痛が続いていて、なんとなく気になったからでした。

ホームページの取材を通して、子宮筋腫についての知識は少なからず持っているつもりでした。友人のなかには筋腫のある人が何人もいて、彼女たちには「ホームページを見て、いつでも広尾を紹介するから」などと言っていた私自身に、子宮筋腫が、それもお腹いっぱい膨大している筋腫があらうとは、全く予想もしていないことでした。

なぜ、これまで気がつかなかったのか。それは月経の異常がなかったということに尽きます。ほぼ28日周期でやってきて、生理痛というほどの痛みを感じることもなく、4日間くらいで終わってしまう。子宮がん検診を何度か受けていますが、触診で筋腫を指摘されたこともありませんでした。

「情報力」という味方

「婦人科へ行くように」と言われて、すぐに斎藤先生に電話、「私、患者になりそうです」。その足で広尾に向いて、エコーによる診察を受けました。「立派な筋腫ができてるよ」と、先生がエコーに映った筋腫の輪郭を線でなぞってくれました。その大きさにビックリ、「800グラムくらいはある」という先生の言葉に2度ビックリ。興奮状態のなかで、すぐに手術を受けることを決めました。

私は幸せな患者です。婦人科を転々とすることもなく、即座に子宮保存手術を受けるという選択ができたのは、広尾の情報に最も近いところに居合わせた「情報力」のおかげです。もし、広尾を知らなければ、私も多くの患者さんが辿ったように、大学病院に行き、「この大きさでは全摘しかない」と言われ、途方に暮れてしまっていたことは容易に想像がつきます。

情報のあるなしによって選択に差が生じることを、今回、身をもって経験しました。全摘手術か、保存手術か、それとも決断を先延ばしするか、その選択は本人が決めるべきことではありますが、少なくとも選択肢のひとつに子宮保存手術があり、保存手術のもつ意味を多くの子宮筋腫患者が知ったなら、子宮を失わずに済む女性は確実に増えるだろうと思います。インターネットのホームページ上に「子宮筋腫オンライン」を開設している目的は、まさにこの点にあるのです。

MRIで見た無数の筋腫の塊

広尾での初診が5月7日。手術を前提とした検査を5月10日に佐々木病院で受けました。佐々木病院というのは広尾と同じ横浜市鶴見にある総合病院で、広尾の術前、術後の検査を引き受けています。MRIやCTの画像を検査終了後すぐに手渡してくれる良心的な病院で（ふつうは早くて半日、病院によっては数日を要するところもあります）、この検査結果を持って広尾に行き、画像をもとに斎藤先生から病変部や手術についての詳しい説明を受けるのです。

MRIやCTの画像は、エコーで見るよりはるかに確実に子宮のただならぬ様子を映し出していました。無数の筋腫の塊が画像の濃淡から見てとれます。濃い塊は硬い筋腫、淡い塊は比較的軟らかい筋腫だと先生が説明してくださいました。「私のは筋腫のレベルでいうとどれくらいですか」と訊ねたら、「9くらいでしょう。これまで自覚症状がなかったのは、よほど運のよいところにできていたということ。でも、放置しておけば早晚、なん

らかの異変は起きます」とのこと。目の前のMRIやCTの画像を見れば、先生の言葉に納得せざるを得ません。

医療におけるインフォームド・コンセントの必要性についてはよく言われます。今回、患者として先生から病状と治療についての詳しい説明を受け、納得して保存手術を選択したことは、まさにインフォームド・コンセントであると実感しました。そして、医師の言葉を裏付けるものがMRIやCTなどのデータであり、データに基づいた説明がインフォームド・コンセントに導くものであることを知りました。多くの患者さんが他の病院で味わってこられた医者不信は、この点が欠けているために生じるのだと思います。

まな板のコイとなって

手術は5月19日の月曜日。初診から12日目の手術というのは随分早いと思われるかもしれませんが、自分の病状がわかった以上、一刻も早く解決したいと思ったこと、斎藤先生の技術力に全幅の信頼をおいていたこと、この2点が早い手術を決断させました。

19日は9時半に入院。直ちに個室に通されて、手術衣に着替え、手術前の点滴、アレルギーチェック、浣腸、剃毛などの処置を受けました。手術の30分前に仮麻酔の注射、午後1時に手術室に入り、麻酔医が腰椎麻酔を施し、斎藤先生の執刀で手術は始まりました。左手には点滴、右手には自動の血圧測定機が取り付けられています。この血圧測定機は10分間隔で自動的に血圧を計る仕組みになっていて、測定機で右腕が締め付けられるたびに「ああ10分たったのだなあ」と知ることができます。手術台の上で、10分間隔に血圧計が作動するのをいくつ数えたことか。6回で1時間、12回で2時間...、腰椎麻酔ですから、もちろん意識はありますが、頭の中は眠たいようなぼんやりとした感じで、そのうち回数を数えきれなくなって「ずいぶん長いなあ」と思っていました。

1時に始まった手術が終わったのは4時半でしたから、長い手術の部類に入るかもしれません。摘出までに2時間、その後の処理に1時間半かかったと後で聞きました。摘出しているときの引っ張られる感じや縫合しているときの圧迫感のようなものははっきりとわかりました。

摘出した子宮筋腫は895グラム、それに腺筋症の疑いのある部分が10グラム、内膜ポリープが1グラム、内膜筋腫が1グラム。先生が思わず「開けてみたら、子宮の病気のスーパーマーケットだったよ」とおっしゃったように、ありとあらゆる種類の病変部分が摘出されました。「全部で907グラムありました」という看護婦さんの声を聞きながら、よくもまあ、こんなにもたくさんの異物を子宮にため込んで、今日までたいしたトラブルもなく過ごしてきたものだ、と手術台の上で驚きのような安堵のような思いにとらわれていました。

「手術後に胃腸障害が出て、何も食べられず。術後の経過は人それぞれですよ」…レポートその2

阿部まさ子（47歳）

長い夜の始まり

術後3週間を過ぎて、食事はほぼ何でも食べられるようになりましたが、私の場合、術後の経過で一番問題だったのが胃腸障害です。私の場合、と書いたのは、手術した人みんなが胃腸に障害をきたすわけではなく、術後の経過は人それぞれだからです。筋腫が小玉スイカほどに大きくなっていても自覚症状のない人もいれば、筋腫は小さくてもそれができている部位によっては症状が強くなる人もいるように、術後の快復の道のりもまた一人一人違います。このレポートでは、私の場合の術後の経過についてお話しします。

5月19日（月）の4時半に手術は無事終了。終了間際に腰椎麻酔が追加されて、腰からは感覚がないまま、ストレッチャーに乗せられて個室に戻りました。尿道には導尿管が入れられ、翌日の夕方までは排尿は導尿管のお世話になります。切開部の少し上のところからは細い2本の管が出て、そこから腹腔内に溜まっている血液や滲出液が管の先のポリタンクに排出されるようになっています。左手には点滴、右の二の腕には自動血圧測定機が巻き付けられた状態でベッドに寝かされました。術後しばらくの間、自動血圧測定機は1時間ごとに作動していたと記憶しています。

「麻酔が切れると痛くて眠れなくなるので、今のうちに少しでも眠ったほうがいいですよ」と看護婦さんには言われるのですが、身動きができない苦しさや吐き気をもよおす気分の悪さが押し寄せてきて、とても眠るどころではありませんでした。長い夜の始まりです。

足にしびれたような感覚がもどって、試しに動かしてみると少しずつ動くようになったのは、夜中の2時頃です。その少し前から、傷口がだんだん痛くなってきて、足が動くようになった頃から痛みはますます強くなりました。麻酔が切れたのです。

腸が移動する

傷口の痛みとは違う痛みが、間欠的に腹部に走るようになったのもこの頃からです。お腹がギュッと絞られるような痛みで、思わずベッドの柵を握りしめてしまいます。この痛み、前にも経験したことがあるみたい…、思い出したのが17年前の陣痛で、間欠的に襲ってくる痛み方は確かに陣痛に似ています。

実は、この痛みは腸が下に移動する痛みなのです。腹腔いっぱい広がっていた子宮筋腫が手術でなくなった後に、それまで上腹部にせり上げられていた腸が一気に下垂するときに生じる痛みなのです。筋腫が大きいほど胃腸や膀胱などの周辺臓器は圧迫されていたわけで、筋腫がなくなって、本来のあるべき位置に臓器がモゾモゾと移動を始めたのです。

傷口の痛みと腸が移動する痛みで一睡もできないまま、ラジオの深夜放送に気を紛らして長い夜を過ごしました。ディスクジョッキーのおしゃべりと懐かしい80年代のポップス。同じ深夜放送を聞きながら眠れない夜を過ごしている人がきっとたくさんいるんだろうなあ。そう思うと少し元気が出て、「痛いのも今がピーク、がんばれ」と自分に言い聞かせました。

夜中の12時と2時に看護婦さんが回ってきて、「大丈夫ですか」と声をかけてくださいます。これまでインタビューした患者さんのなかにも「眠れない手術当夜に、看護婦さんが見回りにきてくれるのが待ち遠しかった」と話してくれた方がありましたが、まんじりともせずに過ごす患者にとって、看護婦さんの存在はなんと心強いことか。

もちろん、痛みを耐えられなければ、ナースコールを押して痛み止めをもらうこともできます。私も明け方に耐えられずにナースコールを押しましたが、「ここまできたら、あと少し。もう痛み止めを打つ段階ではないから、がんばって」と励まされました。

ガスとのたたかい

長い夜が明けました。電動ベッドを起こしてもらい、熱いタオルで顔を拭き、歯を磨き、冷たい水でうがいをし、もうろうとした頭に少し生気が甦りました。なにしろ手術前夜から飲食していない上に、手術後は痛み止めの副作用で口の中が渴いてどうしようもなかったので、冷たい水を口に含んで、ようやく人心地を取り戻しました。

開腹手術のあとは、ガスを出すのが一仕事です。2日目から胃や腸がガスで膨満してくるのがわかります。看護婦さんからは「早くガスが出るように、どんどん寝返りを打ってください」と言われるのですが、まだ傷口が痛くて、足を曲げたり伸ばしたり、腰を左右に動かすのが精一杯。その間にも、膨満感はますます強くなっていきます。

夕方、導尿管を抜いて、身体を清拭してもらい、家から持ってきた下着、パジャマに着替えさせてもらいました。傷口の上部から出ている管はまだついたままですが、どうにかベッドから降りてトイレに行くことができました。立って歩くときには、管の先についているポリタンク持参です。

ガスが出ないうちは何も食べられない、と術後2日目も絶食を覚悟していましたが、思いがけず、夕食にヨーグルトジュース、ポタージュスープ、温かい緑茶が出ました。「食べていいんですか」と聞く私に、「上から食べ物を入れて、ガスを出しますから大丈夫」と看護婦さん。冷たいヨーグルトジュースのおいしかったこと！水もいつでも飲めるようになって、夕食後にポルピックのミニボトルを持ってきてくださいました。

3日目の水曜日、まだガスは出ません。思うことは「早くガスが出ないかなあ」ということばかり。トイレに立ったついでに部屋の中を歩いたり、廊下に出てみたり、歩行練習を始めました。朝食はオレンジジュース、牛乳、プリン。お昼にはおもゆ、味噌汁、卵豆腐が出ました。夕食はおもゆ、味噌汁、しらす干し、さつまいもの甘煮。たまたま部屋に来られた先生の「しっかり食べて」という言葉に応えるように、残さず食べました。

上から食べ物を押し込んでみたものの、ガスは出る気配がなく、夜になって看護婦さんからお腹に赤外線をかけていただきました。こうすると、腸の動きが活発になるのだそうです。赤外線の効果かどうか、しばらくして少量の排便がありました。ガスは出ないままです。

4日目の木曜日、食事は少しずつ普通食に近くなっていきます。朝食は5分粥、味噌汁、ひじきの煮物。昼食はおかめうどん、杏仁豆腐。ここまで「ちゃんと食べて、早く体力を回復しなくては」とかなり無理して食べていたのですが、この日の午後あたりから胃が痛くなり始めました。相変わらず、胃も腸もガスで膨満しています。夕食は絶食となりました。

赤外線をかけたり、ガスを出す注射をしたり、看護婦さんがあれこれ「ガス抜き」の処置をしてくださいましたが、その間にも胃は張って痛くなるばかりです。とうとう鼻から胃に管を通して、ガスを抜くという緊急手段が用いられることになって、少し楽になったと思ったときに、ようやく待望のガスが出てくれました。

一時的な機能麻痺

私の術後は「筋腫がなくなったあと胃腸が一気に下垂して、一時的に機能麻痺を起こすことがあるが、腸を手術しているわけではないので、時間はかかっても必ず治ります」という先生の言葉通りになりました。ガスが出たあとも胃腸の膨満感は消えず、その後の2日は何も食べられない状態が続き、点滴（栄養剤）に逆戻りです。牛乳を2口、3口飲んだだけで胃が苦しくなると、胃から腸にかけて丸太棒のように張ってしまうのです。術後すぐにはがんばって食べすぎたために、胃腸が対応できず、一時的に機能麻痺に陥ったのだということが、今にしてよくわかります。



ようやく食べられるようになって、しばらくはお粥と梅干し、スープだけの味噌汁を時間をかけて食べました。「術後は消化のよいものを、少しずつ、何回にも分けて」という食事についてのアドバイスも先生からいただきましたが、本当にその通りだと実感しています。子宮の手術のあとにこれほど胃腸の不調に悩まされるとは思ってもみませんでした。子宮筋腫が他の臓器を長い年月にわたって圧迫していたことを思えば、こうした不調は起こるべくして起きたものだといっているでしょう。子宮の病気は子宮だけの問題にとどまらないのです。

もちろんこうした不調の度合いは個人差が大きく、たとえ1キ口を超える筋腫があっても術後の食事がスムーズに進む人も多いのです。また、不調の現れ方も、便秘、排尿痛などさまざまだと聞きました。術後の回復はゆるやかです。要はあせらず、無理せず、自分の身体の調子に合わせて少しずつ回復を図っていくことだと痛感しています。

Copyright (C) 1997
HIROO MEDICAL CLINIC

「術後1カ月で完全復帰。術後35日目には生理が始まりました」…レポート・その3

阿部まさ子（47歳）

普通に食べられる幸せ

「日薬」とはよく言ったもので、術後3週間が過ぎる頃からみるみる体力が回復してくるのがわかります。術後に悩まされた胃腸の不調もいつのまにか解消して、食卓にのぼる献立もいつも通りになりました。ビール、ワインなども解禁です。

退院の時に「鉄剤」を56日分いただいたのですが、服用したのは最初の3日だけ。3日坊主もいいところですが、これには理由があって、鉄剤を飲むと便秘しがちになるからなのです。幸い手術をする前から貧血などの症状がなかったため、先生に「鉄剤を止めてもいいですか」と直談判して、首尾よく「普通に食事がとれるようになればいいですよ」との返事をいただきました。

「口から入る食物に勝る栄養はない」、これは入院中に何回となく聞いた先生の言葉です。「点滴で栄養剤を入れても、茶碗一杯のお粥にもかなわない」、術後に何も食べられなくなってしまった私がようやく少しずつお粥が食べられるようになったとき、先生はそう言って喜んでくださいました。普通に食事ができるようになって、術後、会う人ごとに「ほっそりしたね」と言われた顔も身体もまた元に戻りつつありますが、普通に食べたり飲んだりできることがどんなに幸せであるか、身にしみました。

サインを見過ごさないで

術後1カ月は無理せずに過ごそうと思いつつも、元気になるともう家にじっとしてられないタチの私は、術後19日目には仕事（取材）で人に会い、25日目にはテニスコートに立ちました。自転車に乗って買い物に行くようになったのもこの頃です。まだ傷口には多少痛みが残っていて、下腹部をかばいながらではありましたが、「早過ぎるかなあ」と心配するほどのこともなく、あまり疲れは感じませんでした。筋腫がなくなった分、身体が軽くなり、動きやすくなったように思います。

大きな筋腫があっても取り立てて自覚症状がなかった私に、先生は「むしろ筋腫をとった後で、以前との違いを感じる人が多いと思いますよ」とおっしゃいましたが、たしかに術後の変化は身体が軽くなったことばかりではありませんでした。

「そう言えば…」と思いついたことがいくつもありました。頻尿ぎみだったこと、クシャミをすると尿漏れしていたこと、胸がつかえるような感じで1度にたくさん食べられなかったこと、腹部に圧迫感があって仰向けに寝られなかったこと…、毎月の生理に異常がなかったために筋腫があるとは思いつきも見過ごしていたこれらの症状は、実はひとつひとつが子宮筋腫を知らせるサインだったのです。

この1年あまりお腹が出てきて、スカートのウエストがきつくなっていた、これもサインのひとつです。しかし、人間って自分に分の悪いことは合理化してしまうもので、お腹の出っぱりが気になりながら「これは中年太りのせい」と勝手に思い込んでいたのです。

ことに中年期になると、体調の変化を合理化する強力な理由づけができるようになります。「そろそろ更年期だから」という理由です。生理不順も「更年期だから」、腰痛も「更年期だから」、肥満も「更年期だから」。何でもかんでも「更年期のせい」にしてしまうのは簡単ですが、安直な自己診断の陰で病気が進行していたとしたら、これはとてもコワイことです。

術後35日目に始まった生理

術後には胃腸も膀胱もあるべき位置に定着して、のびのびと本来の機能を果たしてくれているのでしょう。頻尿も尿漏れも胸のつかえも見事に解消しました。手術から35日目には生理が始まりました。朝、少量の出血があり、「あれっ、生理かな」と予想しつつも、術後1カ月あまりできちんと巡ってくる生理の仕組みの確かさに驚きました。

あんなに大きな筋腫があって、子宮に2カ所もメスが入られたのに、私の子宮は健在。生理のリズムも狂わない。「術後に生理がきて、みなさん安心されるようですよ」とおっしゃった先生の言葉を思い出して、何も失っていない自分を実感できるのも子宮保存手術のおかげだと思いました。これが子宮全摘手術であったなら、全く逆の喪失感にとらわれていたでしょう。

もともと生理痛などの症状はほとんどなかったのですが、残念ながら多くの患者さんが体験された「手術による生理の劇的な変化」を体感することはできなかつたのですが、出血量はたしかに以前より少なくなったと感じました。

術後1カ月で体調は全快、仕事のエンジンも全開の私を見て、友人たちは「あれだけの手術を受けたのに、ずいぶん回復が早いね」と言います。回復を早めてくれた最大の要因は、斎藤先生の子宮保存手術が身体への負担を最小限に抑えた手術であるからです。全身麻酔でなく部分麻酔、切開部の長さはなるべく短く、レーザーメスを使うことによって術中の出血を抑える、これらのことが術後の早期離床、早期歩行を可能にし、結果的に全身の回復を早めているのです。

術後ほぼ1カ月あまりで生理がきたのも、「もう大丈夫」というサインなのだろうと受け止めています。

4人の看護婦さん

術後の回復を早めてくれたもう一つの要因に、先生と看護婦さんたちの親身のケアがあります。広尾には4人の看護婦さんがいます。鈴木さん、岩佐さん、内海さん、原さんです。手術当夜は患者1人に看護婦さんが1人付いて、マンツーマンでお世話していただきます。つまり、月曜日は2人の看護婦さんが夜勤となるわけで、火曜日以降はローテーションで1人ずつ夜勤につきます。先生もクリニック内の居室に寝起きされているので、術後の管理は万全です。

ナースコールを押せばすぐに飛んで来てくれるのはもちろん、体調のチェックから食事の世話、部屋の清掃、パジャマや下着の洗濯と何から何までやってくださいます。木曜日にはシャワーが使えるようになりますが、シャワーの前には傷口を保護するために腹部をテーピングしてくれて、シャワーが終わるとすぐに傷口の消毒をしてくれます。使ったタオルや着替えたパジャマは洗濯して、たちどころに乾燥機でふわふわにして持って来てくださいます。

シャワーといえば、のんびりと時間をかけて全身を洗い、化粧台で髪を乾かしていたら、看護婦さんが「大丈夫ですか。気分悪くないですか」と様子を見に来てくださいました。いつまでも出てこないで、きっと心配してくれたのだと思います。トイレに入ったまま、なかなか出られずにいた時も、外から「大丈夫ですか」という声が聞こえてきました。

「広尾の看護婦さんたちは、みなさんやさしいですね」と斎藤先生に言ったことがあります。その時の先生の言葉は忘れられません。「患者さんが一番苦しい時に、ナースがやさしくなくてどうするの」。

個人病院のぜいたく

広尾の医療は、月曜日に2人の患者を手術して、土曜日に退院というサイクルでまわっています。2人の患者は1週間、斎藤先生の管理のもとで4人の看護婦さんから完全看護のケアを受けるわけです。月曜から土曜の間には外来の患者さんも来ますから、4人の看護婦さんが入院患者にかかりっきりというわけではないのですが、それにしても2人の入院患者に4人の看護婦さんというのは大病院では考えられないこと。個人のクリニックならではのぜいたくさです

看護婦の原さんは言います。「以前に大きな病院に勤務していた時には、夜勤で何十人もの患者さんを見なくてはならなくて、忙しさに追われて十分なケアができなかった。広尾では患者さんにマンツーマンで接することができるので、ノンビリ屋の私には働きがいのある病院です」。

広尾MCが東京の南青山にあった頃から勤務している鈴木さんは、「患者さんのことを記録してきた大学ノートが6冊になりました。1ページに1人ずつ書いてきたので、どれくらいの数になるのでしょうか。もう何年も前の患者さんでも、ノートを見ると顔を思い出します」と話してくれました。それだけケアの密度が濃いということなのだと思います。

術後に胃腸障害が出て食べられずにいた私を心配して、内海さんは出勤するとすぐ、更衣室に行くより先に寄ってきてくれて、「今朝はどうですか。食べられるようになりましたか」と聞いてくださいました。

岩佐さんは1歳5カ月になる女の子のママ。「もう家に帰ると戦争みたい。家の中がドロボウに入られたみたいに散らかってます」と笑いながら、てきぱきと傷口を消毒してくれたり、薬を持ってきてくれたり。ワーキング・マザーはさっそうとしています。

本当にナースのみなさんにはお世話になりました。

術前・術後のMRI

術後3ヶ月半の9月4日にMRIを撮りました。

術後のほぼ1/10の大きさになっているのがわかります。「術後1年すれば、ほぼ正常な大きさになるでしょう。」と斎藤先生。

術前は膨大化した子宮に押されて隠れていた腸の様子もよくわかります。

